

庶民情報の活性化——文政12年の江戸大火

文政12年(1829)3月21日の江戸大火は、いろいろな意味で興味深い火災であった。この火事は、明和9年(1772)2月の目黒行人坂大火以来の大火事といわれ、江戸の中心部を焼いて大きな被害を与えた。その間にも、文化3年(1806)3月に芝車町から出火した大火があったが、当時の人々には、焼死者の数や焼失家屋数からも明和以来の大火と考えられたのである。

火は神田佐久間町2丁目の河岸の材木小屋から出たが、たばこの火が原因であったとして、友吉という奉公人は江戸払いの処分を受けた(本誌124号参照)。西北風が強かったために、被災地域は日本橋から京橋・芝に及び、大名や旗本の屋敷200余を焼き、焼失総家屋数は37万軒ほどであったという。しかし、江戸の中心部の火災ゆえに、表通りの家屋が11万軒余(全体の30%)、裏長屋が約26万軒(同69%)と、ほとんどが町人居住地域の被害であった。

焼死者も2,800人余であり、明和の大火の1万5,000人に比べれば少ないが、文化3年の1,000人を大きく超えている。幕府は、町人救済のお救い小屋を市中の11か所に設け、米やみそを支給している。

この大火の直後から、庶民情報が急激に活性化してきたことが注目される。寛政改革以来、江戸の民衆たちは言論や風俗など、さまざまな面から規制を受けていたが、これを跳ね返すような情報エネルギーの噴出がみられるのである。3月22日

の鎮火の翌日、早くも焼場絵図(瓦版)が作成され、売り出されている。さらに、筆や墨を持たない者のために、手紙文を刷った瓦版も作成された。この瓦版を買った者は月日と追伸を書き込めば、絵図とともに全国に送ることができるという、商魂たくましい営業であった。

このような瓦版の盛行と同時に、火災にまつわる落首や落書が多数作られている点も注目されるのである。なかでも、寛政改革を行った“名君”である松平越中守定信、その子の定永、あるいは松平越前守(福井藩主)らへの告発が、落首・落書によって行われている。彼等は屋敷が類焼の危機にあったため避難しようとして、逃げ惑う民衆が邪魔だとして殺傷したのである。

越中が抜見で逃る其跡へ かは(皮)をかぶって逃る越前
という落首は、越中ふんどしをもじって両大名をちゃかした作品である。さらに、

越中の御蕎麦手打と評判し
とあるように、「手打ちソバ」と手打ちにあった人びとをにかけて皮肉ったものである。

文化・文政の時代は、民衆の文化行動エネルギーが発散されていく時期に当たっていた。その一つの表れが情報の活性化であったということができる。庶民たちは、大火という災害に乗じて、情報を共有するために、さまざまな手段を用いて情報を活性化させたのであった。

(成城大学文芸学部助教授 吉原健一郎)



国立国会図書館蔵「春の紅葉」より（右上図は同火災の延焼を記したかわら版）

濱町ヨリ坂町辺箱崎靈岸嶋
築地八町堀佃嶋辺迄ノ火ヲ見止圖

